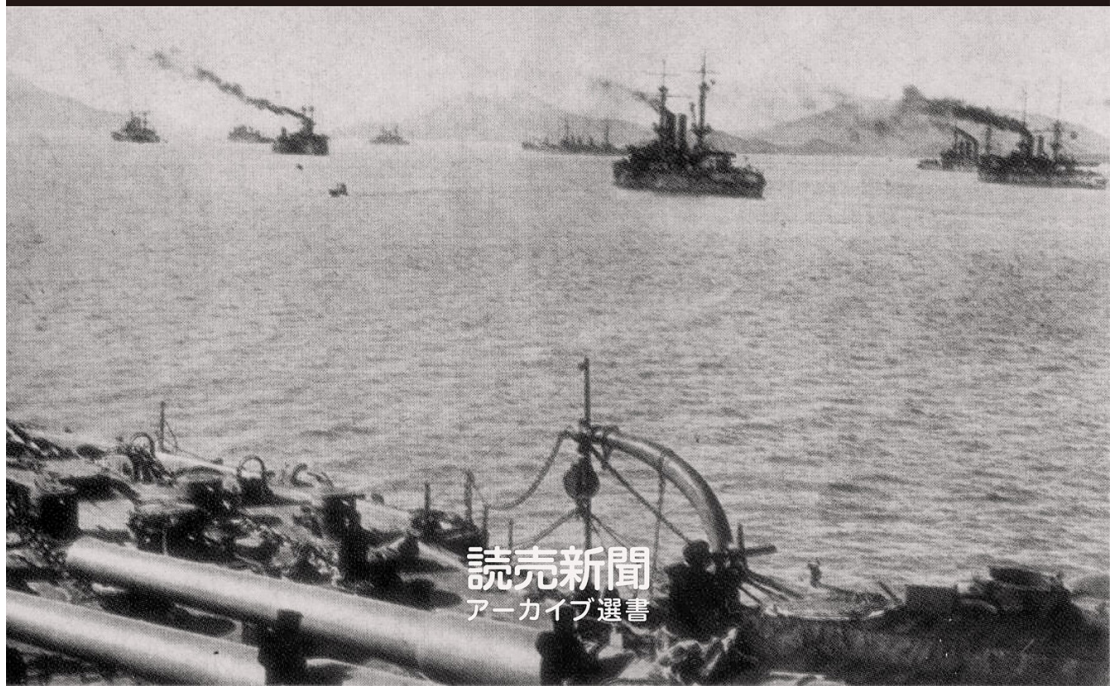
検証 日露戦争

20世紀最初の総力戦

読売新聞取材班



読売新聞
アーカイブ選書

読売新聞アーカイブ選書

検証 日露戦争

20世紀最初の総力戦

読売新聞社 刊

電子版の刊行にあたって

２０２４年２月、日本の近代化の転換点となった日露戦争の開戦から１２０年を迎える。本書は20年前、「開戦１００年」の節目で読売新聞が戦争を多角的に検証した連載をもとに、２００５年に中央公論新社から単行本として上梓（じょうし）され、２０１０年に内容を一部改めて中公文庫の一冊として刊行されたものである。

現在のロシアは２０２２年２月、ウクライナ侵略を開始した。今後も先行きが読めないこの国の動向・背景を考える時に「第零次世界大戦」とも称された日露戦争まで歴史を遡る意味は小さくない。文庫版が出てから干支（えと）ひと回り以上の年月がたち、新たな世代の読者も想定されるなか、「検証日露戦争」を改めて電子書籍として世に出し、ロシアや日露関係に関心をもつ読者の用に供したい。

新聞が伝える「歴史」は、その時点の視座に立った総合的な分析に基づく叙述、ストーリーである。本書は２０１０年の時点で日露戦争を総括した歴史観として捉えていただければ幸いだ。登場する方々の肩書を含め、基本的に文庫版の記述を踏襲している。ロシア政治外交史が専門の横手慎二・慶應義塾大学法学部教授（当時）の特別寄稿「日露戦争の歴史的意義」も再録した。掲載を快諾していただいた横手氏に心より御礼を申し上げたい。本書の執筆者である先輩記者諸氏には鬼籍に入った方もいる。その志を受け継ぎ、電子書籍として残すことで、次の世代の歴史学・地政学的理解に役立つことを心より願っている。

読売新聞東京本社 編集委員　西岡　努

目次

電子版の刊行にあたって

序「第零次世界大戦」としての日露戦争

第一部　日露戦争の実像

1　日露戦争と司馬史観
2　文学と戦争
3　非戦論と反戦論
4　あるスパイの肖像
5　民族主義の光と影
6　高度な諜報戦
7　戦争はなぜ起きたか
8　ベトナム独立運動への影響
9　戦争を支えたユダヤ資本
10　欧米メディアの報じた日露戦争
11　戦争の教訓
12　中国から見た日露戦争
13　「メディア政治」の始まり

特別寄稿

日露戦争の歴史的意義……横手慎二

第二部　〝英雄〟たちの真実

広報外交の提唱者――末松謙澄
軍神の誕生――広瀬武夫
東郷ターンの虚実――東郷平八郎
ほんとうに〝天才〟参謀だったのか――秋山真之
日韓併合の〝悪役〟――伊藤博文
有能なる「軍事探偵」――石光真清
孤独な専制君主――ニコライ二世
冷徹なリアリスト――山県有朋
誤解を招いた自己顕示欲――桂太郎
ボランティア活動の草分け――大山捨松

「無能」論という神話――乃木希典
強硬派外交官の独断――小村寿太郎
素顔のエンペラー――明治天皇

日露戦争関連年表
文庫版へのあとがき

本書は、二〇一〇年七月に刊行された中公文庫「検証　日露戦争」を、電子書籍化したものです。肩書・年齢等は、『読売新聞』連載（二〇〇四年一月二十八日～二〇〇五年五月二十七日）当時のものです。

表紙デザイン＝モダングラフィティ　橘田尚久

検証　日露戦争

20世紀最初の総力戦

序「第零次世界大戦」としての日露戦争

地政学的現実

雨上がりの雲の切れ間から、対岸に朝鮮半島の山々が浮かび上がった。双眼鏡を覗くと、沿岸を走る大型船のマストの上で旗がひらめいているのさえ、はっきりと見える。

対馬列島の北西部、朝鮮海峡に面した烏帽子岳の山頂。韓国の釜山までは、最も近いところで約四九・五キロメートルと、文字通り「指呼の間」にある。「朝鮮戦争の際には、砲撃の音まで聞こえたそうだ」と、郷土史家の武末裕雄氏（59）は言う。

古くから「防人の島」だった対馬は、ロシアとのかかわりも深い。開国直前の一八六一年、ロシア船が接近し、領地割譲を求める事件があったほか、ちょうど一〇〇年前の日露戦争（一九〇四～〇五年）では、南側の対馬海峡が、その帰趨を決する日本海海戦の舞台となった。

二つの海峡をはさんで本土と大陸とをつなぐ対馬は、「大陸から来る外敵を防ぐ国防の要衝」（武末氏）としての役割を担わされてきたのだ。

二十世紀初頭の英国の軍事史家ジュリアン・コーベット（一八五四～一九二二年）は、朝鮮半島と向き合う日本の「地政学的な状況」を、オランダなど欧州大陸のフランドル地方と英国との関係になぞらえた。

これは一九一四年、日露戦争の「海洋作戦」について分析した報告の中で述べたものだが、この報告は当時、英海軍情報当局によって「秘密文書」として扱われ、最近米国で公刊されるまで、一般には知られていなかった。

コーベットは、日本の朝鮮半島政策について、ちょうど英国が、北海の「狭い海峡を支配すること で、強大な大陸勢力にフランドル地方を奪われるのを防ごうとしてきた」のに似ている、と分析した。そのうえで、日本にとってそうした「大陸勢力」とは「一義的にロシア」を意味したと指摘し、日露戦争を海洋国家・日本と大陸国家・ロシアとの戦いと性格づけた。

また「大陸からアゴのように突き出た朝鮮半島」の場合、「陸上からは攻撃しにくい」反面、制海権を握れば「守りやすい」のが特徴だとし、このため海洋国家は、「その利点を失わないまま（半島の）領域内に勢力を広げることができる」として、日本の朝鮮半島進出の背景には、こうした地政学的な現実があったと論じた。

日露戦争は、朝鮮半島と満州（現・中国東北部）をめぐる双方の確執が主要な原因とされる。特に日本は、ロシアが南進し、朝鮮半島を支配するのを安全保障上、最大の危機として恐れ、ロシアによる鴨緑江森林事業への進出などを機に、開戦前年から対露交渉に乗り出したいきさつがある。

1900年頃の東アジア

コーベットの分析は、日英同盟のパートナーだった英国が、日本の立場をよく理解していたことをうかがわせるだけではない。当時の欧州列強の軍や政治の中枢部で、国家の置かれた地理的な状況と外交・安全保障政策とを密接に結びつける地政学的な考え方が、広く受け入れられていたことをも示している。

注目すべきは、同じような考え方が、日本の政治指導部にも見られたことだ。山室信一・京都大学教授は、日本の「国家独立自衛の道」は「主権線」と「利益線」とを守ることにあるとした山県有朋（一八三八～一九二二年）の名高い意見書「外交政略論」（一八九〇年）には、明らかに「地政学的な発想」があるという。

山室教授によると、地政学を最初に日本で体系的に紹介したのは、英国で学び、後に駐スペイン公使などを務めた外交官・稲垣満次郎（一八六一～一九〇八年）で、山県の意見書と相前後して出版された論考「東方策」（一八九一年）の中で、東西を貫く鉄道網と並び南北を結ぶ「シーレーン」の重要性を論じ、「海洋国家としての日本」を初めて位置づけたという。

交通や通信、航海術、武器技術などのめざましい発達に伴い、十九世紀末から二十世紀にかけて生まれた国防理論――コーベットの海防論や米海軍史家アルフレッド・マハン（一八四〇～一九一四年）の海洋地政学のような新しい戦略思想が、この頃すでに、日本の軍事・政治の世界でも独自に体得されていたのだ。

日露戦争をめぐっては、長い間、「帝国主義戦争」か「祖国防衛戦争」かという不毛な論争が続いてきた。二〇〇四年で開戦一〇〇年を迎えたのを機に、日本の「大陸進出」の負の側面をことさらに強調し、日露戦争と後の太平洋戦争とを直接結びつけようとする極端な見方さえ目立っている。しかし、二十世紀初頭の世界で、日本のような海洋国家が、大陸勢力の浸透を恐れ、海峡の向こう側の安全保障に強い関心を抱いたのは、むしろ当然のことだったのではないか。一世紀近くも顧み

られなかった英海軍史家の報告からは、「地政学的な発想」こそが常識だった時代の「世界の実像」が浮かび上がってくる。

日本が置かれた地政学的な現実は、一〇〇年前も今も、変わっていない。日本列島は、朝鮮半島という「匕首（あいくち）」を脇腹に突きつけられ、その半島の北半分には、核武装に固執する北朝鮮がある。

明治の先人たちが日露戦争という未曽有（みぞう）の国難をどのように乗り切ったかを理解するためには、まず「地政学的な発想」という当時の時代精神を呼び起こし、そこに立ち返ってみなければならない。それは自ずと、今日の外交や安全保障を新しい目で見ることにもつながるだろう。

「第零次世界大戦」――最初の総力戦・消耗戦

日露戦争開戦直後の一九〇四年二月、イタリアのミラノ・スカラ座でプッチーニ（一八五八～一九二四年）のオペラ「蝶々夫人」が初演された。長崎を舞台にしたこの名高いオペラは当初、日本人にハエやクモを食べる習慣があるかのように描くなど、偏見に満ちていた。

ところが翌々年十二月のパリ公演では、舞台は一変していた。プッチーニが自ら大幅な改変を行ったためで、現在はもっぱらこの改訂版が世界の舞台で演じられている。

日露戦争の風刺画。「コサックの朝食」とある。ロシアの雑誌『ロジーナ』より

プッチーニによる改変は、ポーツマス条約締結（一九〇五年九月）から一年余り、日本が欧州列強と並ぶ「大国」と認められるに至った時期に当たっている。改変の主な動機は初演の失敗にあるとされるが、オペラ歌手の岡村喬生氏は「プッチーニは当時、日本公使夫人を通じて日本情報を得ていた。（日本の勝利を知って）偉いやつだと思って、内容を改めたこともあり得る」と述べる。

二十世紀最初の大規模な近代戦だった日露戦争は、同時に近代化途上のアジアの弱小国が初めて欧州列強を破った戦争でもあった。

横手慎二・慶應義塾大学教授は、この戦争こそが「二十世紀の始まり」を画したとみる。

その理由として「総力戦」「科学技術の戦い」という性格のほかに、この戦争を契機に理想主義を掲げるアメリカ外交の登場、欧州列強以外の大国・日本の出現という、その後の国際秩序を揺るが

す事態が生まれたことを強調する。また従来、第一次世界大戦（一九一四～一八年）が二十世紀の出発点とされてきたのは、「ヨーロッパ中心の歴史観」に過ぎないのではないかと疑問を呈する。

一方、カナダ・ブロック大学のデイビッド・シンメルペンニク準教授らは、のちの第一次世界大戦を先取りし、その原型になったという意味で、日露戦争を「第零次世界大戦」と呼ぶ。

二つの戦争の共通点として「何万もの兵員が有刺鉄線と塹壕と地雷をはさんでにらみ合う」という戦闘の特徴などとともに、「国内戦線」の存在をあげ、実際の戦場とは別に、国内政治あるいは世論が生み出すもう一つの「戦線」が、「戦闘と深く結びついた」ことに注目する。

ロシアで「血の日曜日事件」（一九〇五年一月）が戦争継続の足かせとなり、日本ではポーツマス条約に不満を持つ民衆が「日比谷焼き討ち事件」（同年九月）を起こしたように、今や戦場だけでは決着がつかない「二十世紀の戦争」が出現したのだ。

実は、こうした現象は二十世紀直前の一八九八年、当時ロシア領だったポーランド出身の無名の思想家によって予言されていた。銀行家・鉄道経営者だったイワン・ブロッホ（一八三六～一九〇二年）が首都ペテルブルクで出版した長大な書『未来の戦争』で述べたもので、二十世紀の戦争は「人的・経済的資源の消耗戦」になることを、資料を駆使して明らかにしていた。

ブロッホは、普仏戦争（一八七〇～七一年）以来の火器の発達などによって、正面攻撃に頼る戦闘は過去のものになったと断定した。今後の戦争は必ずや「長期化」と「兵力の消耗」、膨大な「財政負担」を伴うとし、ロシア政府を念頭に、戦時統制は国民経済を弱らせ、国内に「政治不安」を引き起こし、やがては「革命の勝利を招く」――と警告した。

等松春夫・玉川大学助教授（国際関係論、当時）によると、生前「空想主義者」と退けられたブロッホは、「日露戦争」「第一次世界大戦」を予見した先駆者とみなされ、没後一〇〇年を経て「復権」を遂げつつあるという。

しかし、このブロッホの説には致命的な誤りがある。将来起こりうる「総力戦」の相手として、あくまで欧州列強を想定し、日本については「深刻な脅威とはなりえない。いくら海軍力を増強しても、ロシアと戦争することなど、思いも寄らないだろう」とみくびっていたことだ。

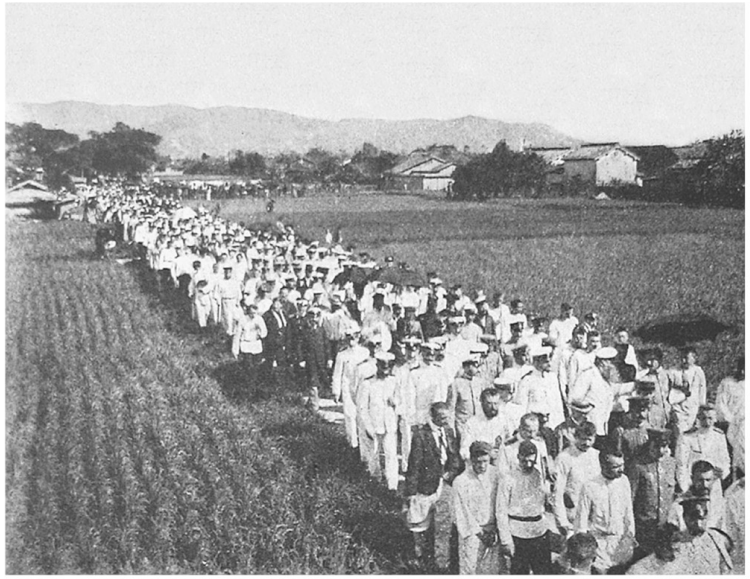
総力戦の登場やロシア帝国の崩壊を見通し、帝政下の被抑圧民族でもあったブロッホでさえ、わずか六年後に日本との間で大規模な近代戦が起こることなど、想像だにできなかった。この戦争は、当時の世界にとって、それほど衝撃的な事件だった。

日露戦争は、まさに「二十世紀の始まり」「第零次世界大戦」と呼ぶにふさわしい。最初の総力戦を戦った当時の日本を、二十世紀の世界史という広い観点から検証し直す動きが、今、内外で始まっているのだ。

新たな史実発掘――一〇〇年経て、なお謎多く

日露戦争終結から二年後の一九〇七年八月、後に東京・神田「ニコライ堂」の大司教となるロシア正教の宣教師ニコライ（一八三六～一九一二年）は、愛媛・松山などを訪問し、各地で多くのロシア将兵の墓を発見した。そのうち島根・隠岐島にあった一三基の墓は、「四フィート（約一・二メー

トル）ほどの石の表面に十字架と銘が刻まれ、一部は傾きかけているが、十分風雪に耐えうる立派なもの」だった。



松山収容所で行われたロシア人将校の葬式。戦争直後のロシアの文献より

地元住民が、敵国の将兵の墓を建て、守ってきたのを知ったニコライは、その「親切心」に感銘を受け、当時の駐日ロシア大使に対し、建立に費やした代価と「感謝の言葉」を、ぜひ日本側におくってほしいと願い出た――。

この逸話は、ロシア誌『イストーチニク』（一九九九年第二号）に掲載されたニコライ自身の手紙によって明らかになった。同誌によると、この手紙が公開されたのは初めてで、また日本側がロシア将兵を「手厚く葬った」ことを示す史料が公表されること自体、ロシアではあまり例がなかったという。

日露戦争で日本側がロシア人捕虜を寛大に扱ったことは、よく知られている。これは「文明国家」の仲間入りを目指し、国際法の遵守を命じた当時の日本政府の方針によるもので、特に松山の収容所では、捕虜は「一等車」で迎えられ、読み書きを習い、「市内を往来」することさえできた。

＊この続きは製品版でお楽しみください。

読売新聞アーカイブ選書

検証　日露戦争
20世紀最初の総力戦

発行日　2023年11月25日
著　者　読売新聞取材班
発行者　村岡彰敏
発行所　読売新聞東京本社
〒100－8055　東京都千代田区大手町1－7－1
URL：https://www.yomiuri.co.jp/
© 2023　The Yomiuri Shimbun

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、インターネット上に掲載すること、および有償、無償にかかわらず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。なお個人利用の目的であっても、コピーガードを解除しての複製は、法律で禁じられています。